



私は外国人留学生として日本で博士課程に在籍し、がんに関する基礎研究に取り組んでいます。がんプロでは、自分の研究分野だけでなく、さまざまながんの症例について学ぶ機会があり、特に希少がんの症例や、診断に至るまでの臨床的な考え方、治療方針を決定するまでの流れが大変勉強になりました。基礎研究を行う中では得ることのできない臨床的な視点に触れたことで、自分の研究と実際のがん医療とのつながりを改めて考えるきっかけにもなりました。

また、外国人として日本の医療や研究に触れることも、視野を広げる貴重な経験となっています。今後、臨床に携わる機会があれば、今回学んだ内容をさらに深め、研究と臨床の両方の視点からがん医療について学んでいきたいと考えています。

2025年度修了生 がん薬物療法専門医療人養成コース 劉 霽雯 さん



ある症例でTP53変異を伴う若年発症がんに出会い、強い家族歴があれば遺伝性腫瘍症候群を積極的に疑い早期に遺伝子パネル検査を検討すること、そして分子機序の理解が発癌リスク評価やオラパリブのような分子標的薬を用いた治療選択に直結することを実感しました。コースでは、こうした経験を体系的なエビデンスの読み方と最新のがん薬物療法の知見に照らして整理し直すことができ、断片的だった経験が一本の軸でつながった感覚があります。現在取り組んでいるトランスレーショナルリサーチや臨床試験デザインのテーマにも、コースで得た薬理学・臨床薬理の視点がそのまま生きており、海外と日本、臨床と研究という異なる立場を自在に行き来しながら考えられるようになりました。日々目まぐるしく移り変わる症例一つひとつからも、その都度新しい発見と学びがあります。

2025年度修了生 がん薬物療法専門医療人養成コース 匿名 さん



本講義では、がん治療は臓器の枠を超えて進化し、特に原発不明がんでは分子病態に基づく治療選択が主流であると症例検討を通じて学びました。自身の大学院の研究ではゲノム解析を用いた希少リンパ腫の予後予測指標の開発プロセスに触れましたが、その手法が固形腫瘍にも応用可能であることを実感できたのは大きな収穫です。免疫チェックポイント阻害薬の普及に伴い課題となる免疫関連有害事象に対し、血液内科で培った免疫毒性管理の専門性を固形腫瘍へ展開できるよう、ゲノム医療の知識を今後も深めてまいります。患者さんに寄り添う臨床腫瘍医として心理支援にも力を注ぎ、固形がんと血液腫瘍を橋渡しする新規治療開発に貢献できるよう、研鑽を重ねてまいりたいと存じます。

末筆ながら、本コースの指導教官の皆様に心より感謝申し上げます。

2024年度修了生 がん薬物療法専門医療人養成コース 匿名 さん